バスク伝統音楽の推進者、ミケル・ラボア逝去！

バスクで広く愛唱されている「チョリア・チョリ(鳥は鳥)」で有名なミケル・ラボアが、12月1日午前5時、ギプスコア県サン・セバスティアンの病院で亡くなった。享年74歳。バスク伝統音楽の推進に尽力したとして、同県から文化功労賞の授与が決まった矢先のことだった。

長らく音楽活動を休止し自宅静養中であったが、この突然の訃報にバスク全体が悲しみに包まれ、ラジオやテレビでは一日中、追悼番組が続いた。

ギター片手にアルゼンチンのユバンキの曲を歌い始めた思春期のラボア。マドリッドやサラゴサ大の医学生時代には、バスク出身の学生仲間らとバスク民謡を歌い、1964年頃に小児精神科の研修医としてバルセロナの病院に就いたラボア。

時はフランコ独裁政権下、バルセロナではカタルーニャ語で歌う〈ノヴァ・カンソ〉運動の興隆期であった。ライモンと「16人の判事」のメンバーのコンサートに衝撃を受け、バスクでも同じような運動を行おうと、ベニート・レルチュンディらと〈エス・ドク・アマイル（十三はない）〉を興した。このグループは72年に解散するまで、ルーツに根ざしたバスクの新しい歌運動の牽引役となった。

自閉症児を担当する精神科医でもあったミケル・ラボアは、その叫び声を模した「ゲルニカ」でゲルニカ空爆の悲惨さを劇的に表現し、「コムニカシオ・インコムニカシオ」でコミュニケーション問題を提議する。「イチャソア・エタ・レオラ」では打楽器としてチャラパルタを取り入れるなど、「レケイティオ」と題する実験曲シリーズでアバンギャルド的なユニークな作品を数多く発表した。今年初めにリリースされたコンピレーション盤『レケイティオアック』は、ラボアの独特な世界を浮き彫りにしている。2006年7月11日、サン・セバスティアンで開かれた平和コンサートが、ラボア最後のステージとなった。

パリ在住の本誌ライター植野和子は、99年5月号掲載の「フランス・バスクとスペイン・バスク、ふたつのバスクの接点を求めて」（『魂のうたを追いかけて』（音楽之友社）に転載）の取材でインタビューして以来、ほぼ毎年バスクを訪問し、ラボア夫妻と親交を深めていた。

ミケル・ラボア夫妻と、植野和子女史（右端）
(©Agurtzane)

「昨夏、ラボアに会った時はかなり疲れている様子だったが、こんなに早く逝ってしまうとは思わなかった」ようだ。パリから常時バスク音楽を発信する唯一の局、ラジオ・ベイ。同氏が担当する「国境なき音楽」(Musiques sans Frontières) でも12月6日、ラボア追悼番組を放送した。
(http://www.radiopays.org/plus/archives.php から、ダウンロード可能)

（スペイン●pecotxan）

LATINA № 659 (Janvier 2009)